

【ぶんぶんくん】

このおぼけは、ぶんぶん飛ぶおぼけでのう。

空を飛べるということは、わしらにとっては夢じゃからのう、【ぶんぶんくん】は、わしのあこがれでもあったわけじゃ。

それに【ぶんぶんくん】は、鞆丸（こうがん）じゃのうて、紅顔（こうがん）の、美少年じゃったからのう。

その【ぶんぶんくん】があるとき、

「金ちゃん困った、ぼく飛べなくなったよ」

と、わしに相談にきたんじゃ。

相談されても、飛んだことのないわしには、ようわからん。

それで、わしを飛ばしてくれたら、懐爺を紹介してやる、懐爺なら、【ぶんぶんくん】をまた飛べるようにしてくれるはずじゃと、口からでまかせにいったんじゃ。

するてえと、

「いいよ」

と、わしもめんくらったくらい、【ぶんぶんくん】は即答したもんじゃ。

わしは【ぶんぶんくん】に連れられて、城跡に行ったんじゃがのう。

石垣の上から飛び立つってことで、わしはじつは、高所恐怖症（こうしよきょうふしょう）じゃからのう、足がふるえて仕方なかったもんじや。

するてえと、

「心配いらないよ、こうして飛ぶんだよ」

というがはやいか、【ぶんぶんくん】はさっさと飛び立ってしまったんじや。

いんや、飛び立ったつもりだったのじゃろうが、【ぶんぶんくん】は、そのまま真っ逆さまに、地上めがけて落下してしまったんじや。

わしは、ペしゃんこになった【ぶんぶんくん】を、上から見下ろしながら、土下座（どげざ）して謝りたいとおもったんじやが。

するてえと、紙っぺらみてえになった【ぶんぶんくん】は、風に吹かれて、ぶーんぶーんと気持良さそうに、どこかへ飛んでいっちまったん

じゃ。

まだまだいるけど、喋っていると、なんだか背筋が寒くなってきよつので、これくらいにしておくぞい。

これで、学校の怪談は、おしまいじゃ。

*

*

「金ちゃんなら、もっと逢ったでしょう」

「それがわからんから、おしまいなんじゃ。つまりのう、あのおぼけは、ほんとうにおぼけだったのか、おぼけっぽかっただけで、やっぱり、しょうしんしょうめい、しょうがっこうの、ともだちだったのかもしれない。なんか、そうおもうことがあつてのう」

「そうですか。おぼけは常におぼけっぽいものです。けれども、人間はたまにおぼけっぽいものです」

「もっと、しんこくなはなしでのう」

「深刻ですか」

「たとえばじゃがのう、わしのしょうがっこうには、どうしたわけか、しょうがいのあるこどもが、けっこうおる。めがよくみえないこども、ほとんどあるけないこども、せなかにおおきなこぶがあるこども、ぜんぜんべんきょうができないこども、ときどきうなったりさけんだりするこども、そういうこどもらを、わしらはおぼけじゃおぼけじゃ、とよぶ、よぶだけじゃのうて、そうおもいこんどる」

「だから金ちゃんは、おぼけにいつも同情的なんですね」

「そらあちがう。わしはおぼけにあこがれたり、やきもちやいたりしたことはあっても、どうじょうしたりはせん。なぜって、おぼけは、ふつ

うのにんげんにはないものを、もつとるからじゃ。でなければみんな、おばけをこれほどこわがったりはしめえ。かいじいが、まえにいとたろ、おだのぶながのはなし。ぼうさんは、ふつうのにんげんにはないものを、もつとるじゃろ。だからおだのぶながは、やきもちやいたんじゃないかのう」

「そうかもしれませんねえ。たしかにおばけは、普通の人間にはないものを、持っているかもしれません。けれどもおばけは、普通の人間にあるものを、持っていないのではないのでしょうか」

「それはなんじゃ」

「それはなんでしょう。それをかんがえるのが、これからのわたしたちの課題ではないのでしょうか」

「わたしたちとは、かいじいとわしかのう」

「それと、多くのわたしたちです」